

◇ 国 語

国 5-1～国 5-15 まで 15 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間の〈社会性〉は、類人猿が見せる集合行動の延長上にあるはずなのに、そこは架橋しがたいギャップをも孕んでいるとみなさないわけにはいかない。連続性と断絶性の両面があるのだ。こうしたリョウギセイをきわめて印象的に示している事実がある。それは、われわれの言語が主として音声様式を活用しているということだ。

言語そのものが、他の動物と人間とを分かち特徴であるということは、誰もが指摘していることだ。ここで注目したいのは、言語が、主として音声を媒体としているということだ。言語が音声であることは当たり前だと思いがちだが、両者の間には

ア な結びつきはない。つまり、音声を媒体にしなくてはならない理由が、あるいは音声によって分節されることがとりわけ都合のよい理由が、言語そのものの本質的な特徴の中に含まれているわけではないのだ。その最もはつきりとした証拠は、聴覚に障害がある人たちの共同体の中で発生する サイン・ランゲージ 手話 である。今、ここで話題にしているのは、

イ に造られた

「手話」ではない。ウ 言語としての手話だ。耳が聴こえない人たちの共同体や集団があれば、そこには、手話が自然発生し、世代的に継承されていく。そうした手話は、音声による自然言語とまったく変わらず、複雑な文法や豊かな語彙をもつ。コミュニケーションの道具としても、また思考の手段としても、音声言語と遜色がなく、とくに不都合なことがあるわけではない。そして、音声による「国語」と同じような多様性が手話にもある。要するに、言語としては、音声を媒体にしようが、視覚的な動作や表情を媒体にしようが、まったく問題がないのだ。にもかかわらず、人間の言語は、なぜか主に音声の様式を採用している。諸国語は音声的には非常に多様だが、どこかの国では聴覚的な言語ではなく視覚的な手話を使っている、ということはない。どうしてなのか。

われわれの言語が主として音声であるため、多くの専門家が、また素人も、人間の言語は霊長類が発する音声の延長上に出現したと考えている。だが、いくつもの理由から、言語が、霊長類の音声からの連続的な進化の産物とは考えがたい。確かに、チ

ンパンジーをはじめとする霊長類は、多様な音声を発するが、それらは、その個体の体内で生じた感情と結合しており、意図的な選択によってトウセイ^Bされてはいない。この点で、霊長類の音声は、音声言語とは エ でさえある。

霊長類に限らず、多くの動物が音声による「コミュニケーション」を活用していることは確かだが、それは、一般に種ごとにコード化されている。この点は、人間の言語と非常に異なっている。言語は共同体ごとに異なり、人間という種に共通した言語は存在しない。動物は違う。すぐれた研究者は、しばしば、自分が研究対象としている動物種の音声をみごとにまねることができ、フィールドを変えると「通じない」ということはない。マハレ^注のチンパンジーを調査する中で習得した音声は、ボツ^注、ウ^注でも問題なく活用できる。どこのチンパンジーも、同じ音声を同じ感情と結びつけているからだ。どうして、人間の言語が、種全体に共通せず、種の中でかくも多様なのか、これもひとつの謎である。

このように、霊長類をはじめとする動物の音声と人間の音声言語の間には共通性が少なく、両者の間になめらかな連続性は無い。そもそも言語そのものに即してみても、なぜ音声が好まれたのかふしぎである。指示的なコミュニケーションには、音声はむしろ不便であり、身振りの方が向いている。音声では、どの対象が指し示されているのか、特定しがたいが、身振りや指差しを通じてであれば簡単である。また、言語はたいてい、誰か特定の人（単数であることも複数であることもある）に向けて発せられるが、音声は、「誰」に向けられているかを特定するのは難しい。ちなみに、動物が発する警戒音は、特定の個体や集団へと意図的に向けられていないことにこそ特徴がある。むしろ、特定の者に向けられずにキノウ^Cすることが求められている。「サイン」にこそ、音声は適しているのである。

このように、言語の本来的なキノウとの関係でも、また系統発生的な事実からしても、音声と言語とは相性がよくない。ヒトの進化のある段階に言語が出現したことは間違いないわけだが、こうした音声との非親和性から、初期の言語は音声ではなく、動作や表情を媒体にしていたのではないかと推測する研究者も少なからずいる。実際、その通りかもしれない。だが、いずれにせよ、どこかの段階で、言語は、音声様式を主とする形態へと切り替わったことになる。どうして、すべての言語が音声様式に切り替わったのか。この点については、さまざまなことが簡単に思いつくため、多くの説が唱えられている。遠く離れている

者同士のコミュニケーションには音声の方が便利だからだとか、手で別の作業をしながらコミュニケーションができるからだとか、である。しかし、誰もが納得する通説はない。通説がまとまらないのは、第一には、何の証拠もないからだ、それだけではない。どの説も、すでに十分に発達した音声言語を有する者からの「後知恵」だからだ。つまり、音声言語が副産物的にもたらした利益を、「原因」として過去に投入しているだけだからだ。どうして、言語の主流が音声様式を採用したのか。

なぜ、この謎を、今この段階で指摘しているのか。言語が音声様式をキバン^Dとしているという事実は、霊長類のコミュニケーションと人間のコミュニケーションとの間の連続と断絶の両方をよくグゲン^Eしているからだ。人間のコミュニケーションが霊長類のそれと系統発生的につながっていることはまちがいない。しかし、同時に、言語の音声性は、両者の間に不可解な飛躍があったことをも示唆^Bしているのである。

(大澤真幸「人間社会への(非)適応的進化」による)

注 マハレはアフリカのタンザニア連合共和国の地名、ボソソウはアフリカのギニア共和国の地名。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A リヨウギセイ

- ①ギシン暗鬼に陥る
- ②モギ授業をする
- ③ギジロクを書く
- ④フギリな行い
- ⑤彼はギゼン者だ

1

B トウセイ

- ①前人ミトウの記録
- ②トウシンダイの人形
- ③家屋がトウカイする
- ④トウセイフウの衣装
- ⑤人口トウケイをとる

2

C キノウ

- ①ジギを逸する
- ②原職にフツキする
- ③平和をシヨキする
- ④キキョクに直面する
- ⑤キキョウな振る舞いをする

3

D キバン

- ①彼は大器バンセイ型だ
- ②バンセイを張り上げる
- ③彼女は力はバンガイだ
- ④おショウバンにあずかる
- ⑤船長がラシンバンを見る

4

E ゲゲン

- ①ゲンユウ勢力を保つ
- ②部下にゲンメイを下す
- ③メイゲンを避ける
- ④ゲンテンに戻って考える
- ⑤宝玉の美しさにゲンワクされる

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① 必然的
- ② 総合的
- ③ 偶発的
- ④ 部分的

6

イ

- ① 能動的
- ② 人工的
- ③ 一義的
- ④ 積極的

7

ウ

- ① 有効
- ② 完全
- ③ 第二
- ④ 自然

8

エ

- ① 紙一重
- ② 親和的
- ③ 対立的
- ④ 相似形

9

問三 傍線部 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 「遜色がない」

- ① 同等ではないこと
- ② 劣ってはいないこと

10

- ③ 寸分違わないこと
- ④ 区別が付き難いこと

(b) 「示唆している」

- ① はっきりと指摘している
- ② 考えさせようとしている

11

- ③ 雄弁に物語っている
- ④ それとなくほのめかしている

問四 傍線部(一)「そことは架橋しがたいギャップをも孕んでいるとみなさないわけにはいかない」とあるが、この一文に表わされた筆者の考え方の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①類人猿と人類との間には大きなギャップが存するが、人間の〈社会性〉と、類人猿の集合行動とは実は同じものではないかと考えている。

②類人猿の集合行動は、一見すると人間の〈社会性〉に類似するので、両者に関連性を見出す人々が多いが、実は全く無関係に発達して来た行動であると考えている。

③人間の社会性は、類人猿の集団行動の進化と捉えられるのであるが、同時に何のつながりもない一面も持っていると考えている。

④類人猿の集合行動の延長上に人間の〈社会性〉があるという通説が信じられているが、その説は、認めがたい欠点を含んでいると考えている。

問五 傍線部(二)「これもひとつの謎である」とあるが、具体的にはどのような謎なのか。その説明として最も適当なものを、

次の①～④の中から一つ選べ。

13

①チンパンジーは類人猿とよばれるように、生物学的に見ると人間と殆ど変わらない存在であるにもかかわらず、言語を持っていないという謎

②例えば「愛」のように、人間の持つ基本的な感情は世界共通であるのに、国や民族によって、愛情を表現する方法が多様であるのは何故かという謎

③チンパンジーの世界では感情と音声の結びつきは共通であるが、人間は共同体によって、感情をいかなる音声および言語に結びつけるかが異なっているのは何故かという謎

④チンパンジーよりも高度な知能を持っているはずの人間が、何故、同じ音声を同じ感情と結びつけることが出来ないのかという謎

問六 傍線部(三)「後知恵」という一語からは、波線「通説」に対する筆者のどのような見解が読み取れるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①従来の研究において、人間社会に存在するあらゆる言語が音声を伴っている原因とされるのは、いずれも音声言語が成立した結果、生じた利点である。

②通説では、言語が音声に伴うようになった原因を、離れた場所とのコミュニケーションに有利とするが、電話発明以前の時代を考慮に入れない浅知恵である。

③通説が音声言語の利点とする「副産物」は、すでに過去のものとなりつつあり、近未来においては、電子メール等の文字によるコミュニケーションが主流となる。

④通説は、太古から延々と続いてきた言語の経てきた各時代の背景を無視して、現代人の狭い視点から考え出したもので、いわば後人の知恵に過ぎない。

問七 筆者の論旨に合致しないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

①音声によるコミュニケーションは、人間特有の行動ではなく、ほとんどの動物においても、警戒音を出すなど、行っている行動である。

②手話は視覚的な動作によって成立している言語である点で、通常の言語とは異なるが、複雑な文法も豊かな語彙も持っている。

③霊長類のコミュニケーションと人間のコミュニケーションとは系統発生的につながっていることは確かである。

④人間の用いる言語には非常に多くの種類があり、そのなかには視覚に訴える表情や動作を媒体とする言語も多い。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

お不動様の伽藍の裏に、愛宕山という雑木の山がある。

何でもその昔は鎌倉防衛の前線だったそうで、多摩川ぞいのキュウリヨウ地には随所に同じような古城跡が残っている。

愛宕山はセツタクとほとんど地続きになっている。と、こういう言い方は人間の身勝手、実は愛宕山に続く斜面を人間たちが開拓し、宅地として造成した結果、中年の小説家が物語に倦んじ果てた早朝に犬を連れて地続きの山中を逍遙することになったのだ。

愛宕山はお不動様の寺域であるから、雑木山とはいえ手入れは行き届いており、城跡の地形を利用したハイキング・コースになっている。

引越してきた当初、歩いて五分とはかからぬ目と鼻の先にそのような自然があったことを知って狂喜した。以来私は、愛宕山があたかもセツタクの属物であるかのように考え、ことあるごとに山中を徘徊しては悦に入っていた。

秋の深まるほどに愛宕山の小径は朽葉におおわれ、趣きを増して行く。

栗、山桜、楓、椿、杉——山中には落葉常緑のさまざまな樹々がハンモするが、とりわけ目をひくものは松の巨木である。

おそらく天然に生い立ったものである。樹齢数百年は経ていると思われる立派な黒松と赤松が、他の樹々を睥睨するかのよう、至るところに聳り立っている。

松ほど姿の雄渾な木はあるまい。花を咲かせ、また紅葉する樹々の中にあつて、老松のたたずまいはまさにかつてこの砦を守つたであろう鎌倉武士の質朴さを彷彿とさせる。

ただし、その質朴さ雄渾さゆえに、松はあたかも書割に描かれた樹木のようにカンカされやすい。愛宕山を逍遙する人々の目は、春は桜に、夏は若葉に、秋は楓に向く。

過日、一夜にして庭先の白樺の葉を吹き落としてしまうほどの大風があった。愛宕山は一晚中、潮鳴りのような唸り声を上げていた。

あくる朝、嵐の去った山道を散歩しながら、私は旧天守台に近いあたりまで登って、愕然と立ちすくんだ。

山中の松の中でもとりわけ立派であった赤松の巨木が根こそぎ倒れていたのである。

足元の斜面が風化してあやうくなっていたうえ、折れた下枝を見れば芯のなかばは朽ちており、老衰のやむなきを感じさせた。樹木がこんなふう^aに死ぬとは考えてもいなかった。

ともあれ江戸時代の初めのころかそれ以前、この場所に生い立った老松の死に、私ははからずも立ち会ってしまった。

あたりの樹木をことごとく薙ぎ倒して往生をとげた赤松のむくろをぼんやりと眺めているうち、私はふとその幹の根元に、ふしぎな傷痕を発見した。

人の身丈でいうなら膝あたりの幹が、五十センチ四方ほど削り取られて、樹芯が露出している。傷痕はその後の生長で丸くかばわれてはいるが、明らかに人為による傷であるとわかった。

近付いて目を凝らせば、露出した樹芯に無数の刃物による切り傷が刻まれていた。

私ははつきりと、傷の理由に思い当たった。戦時中、松の幹から油脂を採取して代用燃料としたのである。五十年の時を経て、傷はありありとその幹にしるされていた。

三年ほど前に、戦争末期の世相を材にとった小説を書いた。私はまったく戦を知らぬ世代であるが、その取材の折に勤労働員で松脂を採取した人の談話を耳にしたことがあった。

松ヤニで飛行機を飛ばそうって言うんだから、もう負けだと思いましたがよ、とかつての女学生は言ったものだ。

本当にそんな技術があったのかどうか、あるいは航空燃料というのは誰かの思いちがいで、実際は何か他の燃料に使用されたのかも知れない。だが、ともあれ物資の欠乏した断末魔の戦のさなか、多摩地区の松から燃料用の樹脂が採取されていたのは事実である。

老松の死について、私はふたたび考えこまねばならなかった。

彼は花も咲かせず紅葉もせず、ひたすら書割のように生きた。たぶん三百年という年月は、樹木の天寿ではなかったであろう。根元の斜面を宅地開発に削ぎ取られ、車や工場のもたらす排気を吸って、彼の根はあやうくなり、樹芯のなかばは朽ちてしまつたのだらうと思う。

それはそれで仕方のないことかも知れない。だが彼は、五十年前の戦のさなか、生命の樹液をしぼり出して、飛行機をとばしていた。

そんなことは、もう誰も記憶にもあるまい。ましてや環境保護を訴える有志の人々も、彼の「武勲」については、まさか思い及ぶまい。

老松のむくろに思いをいたしながら、ふとこんなことも思い出した。

戦の取材を亡父に申し入れたとき、鼻で嗤われた。闇市での華々しい立身の話は好んで提供してくれたが、カンジンの戦のことについてはついぞ語ろうとはしなかった。

子供に話すようなたいそうなことは何もしちやいねえと父は言った。そんなことは勇ましい戦をした兵隊に聞け、と。

だが、そう言う父の左肩には大きな弾痕があつた。終生左手の自由がきかなかつた。

父は昨年、およそ老松の印象とはほど遠い、遊蕩の限りをつくして死んだ。病床で私の戦争小説を読んだとき、こんなつまらねえものを書きやがって、と洩らしたそうだ。

愛宕山の赤松は、今もそのむくろを錦繡の山中に晒している。

毎朝、犬を連れてそこを通りかかるとき、永遠に思い至ることのできぬ彼の生涯について考えこまねばならない。

ただひとつだけ、四十四歳の人間にもはつきりわかることがある。

愛宕山の赤松は風に吹き倒されるその朝にも、彼のうちなる老衰や傷痕などおくびにも出さず、大空にちゃんと聳り立っていた。

(浅田次郎『君は嘘つきだから、小説家にならねばいい』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A キュウリヨウ

- ①リヨウヤクは口に苦し
- ②リヨウキ的な犯罪
- ③リヨウヨウ生活を送る
- ④冬物イリヨウ品を買う
- ⑤天皇皇族のリヨウボ

16

B セツタク

- ①車がセツキンする
- ②事態がセツパクする
- ③儲けをセツパンする
- ④セツソクな対応をする
- ⑤栄養分をセツシュする

17

C ハンモ

- ①生徒のモハンとなる
- ②国家がハンエイする
- ③ハンロンを封じる
- ④家電リヨウハン店
- ⑤ハントを拡大する

18

D カンカ

- ①ドラマにカンドウする
- ②政府のコウカン
- ③連載がカンケツする
- ④船のカンパン
- ⑤カンビヨウに疲れる

19

E カンジン

- ①非難をカンジュする
- ②雑誌をカンコウする
- ③カンゾウの病気になる
- ④イツカンの終わり
- ⑤カンケツに説明する

20

問二 傍線部 (a)・(b)・(c)・(d)・(e) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選

(a) 「随所」

- ① 目に見えるところ
- ② いたるところ
- ③ 向こうの方
- ④ すばらしいところ
- ⑤ すぐのところ

21

(b) 「やむなき」

- ① 仕方なき
- ② 衰え
- ③ 不自然さ
- ④ 行く末
- ⑤ 真実味

22

(c) 「はからずも」

- ① いやいやながら
- ② 目の辺りに[※]
- ③ 思いがけず
- ④ 一度ならずも
- ⑤ そんなふう

23

(d) 「断末魔」

- ① 真つ最中
- ② 最初期
- ③ ちょうどその時
- ④ 死ぬ間際
- ⑤ 飢餓状態

24

(e) 「有志」

- ① 志や関心のある人
- ② 意志の強い人
- ③ 志を遂げた人
- ④ 志望動機を持つ人
- ⑤ 闘志を持った人

25

問三 傍線部(一)「人間の身勝手」とあるが、なぜそういう言い方が「人間の身勝手」であるのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

- ① 愛宕山はもともとお不動様の寺域で、鎌倉防衛の最前線だったから
- ② キュウリヨウ地の古城跡を利用したハイキング・コースを造ったから
- ③ 中年の小説家が物語に倦んで、犬を連れて地続きの山中を逍遥するから
- ④ お不動様の裏手の愛宕山が自分の家とほとんど地続きになっているから
- ⑤ 愛宕山に続く斜面を人間が宅地として造成した結果、地続きとなったから

問四 傍線部(二)「そのような自然」に当てはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

- ① 人間たちが開拓し造成した斜面
- ② 朽葉におおわれた愛宕山の小径
- ③ 山中にある落葉常緑のさまざまな樹々
- ④ 自宅と地続きになった山中
- ⑤ お不動様の伽藍の裏の愛宕山

問五 傍線部(三)「ふたたび考えこまねばならなかった」とあるが、「ふたたび」に対して、筆者が初めに考えていたことを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

28

- ①老松がひたすら書割のように生きたことについて
- ②老衰のやむなきを感じさせる松の死について
- ③三百年の歳月が樹木の天寿ではなかったことについて
- ④多摩地区の松から燃料用の樹脂が採取されたことについて
- ⑤松が生命の樹液をしぼり出して飛行機をとばしていたことについて

問六 筆者の戦争小説に対して、傍線部(四)「こんなつまらねえものを書きやがって」と洩らした父親のことを、筆者はどのように感じていると思われるか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

- ①戦の取材を申し入れたときに鼻で嗤うような憎々しい人
- ②子供に話すようなことは何もできなかった地味な人
- ③戦争で傷を負い左手の自由がきかなかったかわいそうな人
- ④カンジンの戦のことについては語ろうとしない無理解な人
- ⑤うちなる老いや傷痕のことなど決して口に出さない毅然とした人

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

30

31

- ① 父は筆者の戦争小説を読んで、つまらねえもの書きやがってと鼻で嗤うような冷たい人間だった。
- ② 戦争のことについてついぞ語ろうとしなかった父は、ひたすら書割のような人生を生きただった。
- ③ 左手の自由がきかず遊蕩の限りをつくして死んだ父親は、倒れた老松に到底及ばない存在だった。
- ④ うちなる老衰や傷痕などおくびにも出さず大空に聳り立っていた老松を、筆者は亡き父の姿と重ねている。
- ⑤ 環境保護を訴える有志の人々は、父の武勲について思いを及ぼすこともあるにちがいない。
- ⑥ 今もむくろを錦繡の山中に晒している愛宕山の赤松の姿は、戦を知らぬ私の戦争小説に似ている。